

神社と講社

カサガミ様

匠 探訪

34



瘡大神の鳥居に掛かる表札

いさん)してお札を受けるならわしがありました。
昨年暮れにその資料が見つかったので紹介します。この神社は「カサガミ様」と呼ばれ、皮膚病に効果があると信じられていました。

講社は1組20人で1講社となり、その代表2人が春と秋の年2回、神社に代参することになっていました。講社は、現在の市内はもとより旭市、横芝光町など近隣から銚子市、東京深川など広範囲にわたりました。

この神社は二百数十年前にまつられたとされ、1835年(天保6年)には多古、野手、八日市場村の7名の信者により手洗石が奉納されていることから周辺村むらに信仰圏が広がっていたことが知られます。

いつごろから講社が盛んになったかわかりませんが、石の鳥居が寄進された1911年(大正10年)ごろには活況を呈したようです。

戦後、医学の進歩により皮膚病も神仏をたよって治すことは少なくなり、「カサガミ様」の講社も昭和30年代半ばから急速に衰退しました。

問八日市場図書館 ☎ 73・3746

一年の始まりに、「初もうで」に出かけるようになったのはいつ頃からでしょうか。

調べてみると、およそ350年ほど前から幕府の政策で民衆すべてが菩提寺(ぼだいじ)を持つことになり、寺院や神社との結びつきが強くなってからとされます。当時から寺の隣に神社がまつられることが多く、新年を迎え双方におまいりしたことが現代まで続いているのでしょう。

現在、市内には66の神社が宗教法人に登録され、江戸時代の村(現在の大字)が60余

イレン」などを行っているものもあります。

これらの神社は、ムラの氏神(うじがみ)や産土神(うぶすながみ)と呼ばれ、所願成就(じょうじゆ)がんじょうじゆ)の神として信仰されてきました。それに対し「雨乞い」縁結び「海上安全」など特別の利益(りやく)があることで知られる神社もあります。

匠 匠地区大浦の「瘡(カサ)大神」もその一つです。この神社では、講社(こうしや)といって信仰する集団を組織し、その代表が代参(だ